

読むことの誤謬

ナサニエル・ホーソーン「痣」を読むことのアレゴリー

上原正博

1 はじめに

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) のロマンスをアレゴリーの再検討から読み解いていくマグナス・ウーレン (Magnus Ullen) は、物語の意味を決定するのが作者の意図であるのかという問題を巡る議論において、ポール・ド・マン (Paul de Man) の主著の一つである *Blindness and Insight* (『盲目と洞察』) から、次の有名な一節をひびいている。(Ullen 23)。

志向性という概念は、その本質において、物理的なものでもないし、心的なものでもなく、構造的なものである。その概

念は、主体の経験上の諸関心は別として、主体の活動を含むものである。それらの諸関心が構造の志向性に関係している場合は除くけれども。構造的である志向性が、結果として生じる対象の、すべての部分における、その構成要素間の関係を決定づける。しかし、ある対象を構造として組み立てようとする人間の、ある特定の思考状態と、実際に組み立てられた対象との関係は、まったく蓋然的である。椅子は、それが腰掛けられるものと決められているという事実によって、その構成要素すべてにおいて構造が決定されている。しかしながら、この構造は、椅子の各部品を組み立てていく組立職人の思考に依るものではない。文学作品の場合はもちろんより複雑である。それでも、行為の志向性は、詩的存在の統一性

を脅かすどころか、より確かに統一性を造りあげる。(de Man, *Blindness and Insight*, 25)

この箇所です・マンが述べているのは、書き手である主体による意図と出来上がる作品との関係が蓋然的であり、書き手の意図(ある特定の思考状態)は後景に退けられ、作品の構造の志向性が前景化されるということである。

それをド・マンの用いる椅子の例を敷衍したイメージで言い換えるならば、「福笑い」という遊びに喩えることができるかもしれない。顔の構造は人それぞれ異なるが、ある程度の要素(目、鼻、口)のあることは認められる。その意味で、我々の理解する平均的な顔が参照すべき構造としてあるわけだが、福笑いには、プレーヤーが目隠しをして(盲目である)、顔の構造に合わせていく遊びである。そうして出来上がるものと、顔の構造の志向性との差異に笑いが生じることになる。ここにプレーヤー(組立職人)が意図したのではないものが出来上がる。他のプレーヤー(観察者であり、解釈者・読み手でもある)は、当のプレーヤーが顔を組み立てようとしているという前提を抱きつつ、単なる読み手とは異なり、作成のプロセスを観察できるといふ特権を持ちながらも(そして、それがこのゲームのお

もしろさでもあるが)、出来上がった顔に笑うことになる。と同時に、観察者だけでなく、当のプレーヤーも目隠しを外したときに、出来上がった顔に新たなかたち(意味作用)を見いだす(洞察する)ことにもなるだろう。

このイメージはド・マンによる自伝研究(“Autobiography as De-facement”)に触発されたものだが、ここでは、顔が与えられることと奪われることが、修辭化と非・修辭化の喩えとして触れられている(“Our topic deals with the giving and taking away of faces, with face and deface, figure, figuration and disfiguration,” de Man, *Rhetoric*, 76)。⁶ とはいえ、この関心は、ド・マンも述べているように、自伝というものが、その参照枠である対象(referent)とその出来上がったモノとの差異を生みだしていることにある。つまり、「自伝は驚くべきさまで完全となることの不可能性、比喩の代入から成るすべてのテキスト組織体の総体化(そしてそれが現前すること)の不可能性をほきりと示している」ところにある(“it [autobiography] demonstrates in a striking way the impossibility of closure and of totalization (that is the impossibility of coming into being) of all textual systems made up of topological situations,” de Man, *Rhetoric*, 71)。⁷ これほど、マンのプラトニ

必ずしもド・マンの理解を助けることになるわけでもないという了解が、「アレゴリーは常にメタファーのアレゴリーであり、そしてそのため、アレゴリーは読むことの不可能性のアレゴリーである」(“Allegories are always allegories of metaphor, and as such, they are always allegories of the impossibility of reading,” de Man, *Allegories*, 205) とド・マンの主張に接続されることになるだろう。テキストの解釈は常に誤読を伴う。

このようなテキストへの構えを敷衍し、冒頭で紹介したウーレンは、「焦点を言明の意味そのものから言明が意味を伝えるままに移行させること」(“shifting the focus from the meaning of a statement to the way in which the statement communicates its meaning,” Ullén 24) によってテキストが解釈されるをえないが、そういった行為の孕む後退は、それを反覆する触媒的概念の考察によって克服しようと論じ、その概念をホーソーンのロマンス論に求めていく。このようなウーレンの議論に啓発されながらも、本論はロマンスを論じるのではなく、冒頭に見た構造の志向性とその作用がホーソーンの短編にも見いだしうることを論じていくことになる。一言断りを入れておくとするならば、本論は、作家としてのホーソーンとその作品の関係を論じるのではなく、主に作品内における読むという行為の作用に注目して、ここで取りあげる「痣」が、「知覚の弁証法

的な様態”(“a dialectical mode of perception,” Ullén 22) としたのアレゴリーの一例となりうることを示そうと試みるものである。先回りして、おおまかに述べておくならば、この短編は痣をめぐる誤読の物語である(1)。

2 「痣」

そのプロットがシンプルなゆえに、「痣」(“The Birth-mark,” 初出一八四三年)は新しい読みの可能性を探ることが困難に思われるような作品であるだろう。ジョージアナ(Georgiana)のおおにある母斑をめぐる、それを物理的な力(投薬による麻酔とナイフによる外科的切除)で除去しようとした科学者である夫エイルマー(Aylmer)であったが、痣の除去には成功するものの、愛する妻が死んでしまうという物語である。文字通りに読むならば、一人の男性の妄想と、その人間の科学への信奉が生み出す悲劇としか言いようがないのだが、それだけに、そういったシンプルな面だけに眼を向けて、そこに何ものかを読み取ろうとしたときに、多少ながら恣意的な読解(見解)が入り込んでしまうことを避けるのは難しいかもしれない。

まるでそのことを示すかのように、物語はジョージアナの痣そのものについて異なった解釈(読み込み)を提示する。語り

手によれば、彼女に「夢中な者たち」(“lovers”)は、その小さな手のかたちをした痣が、彼女の生まれる以前に妖精が彼女を訪れ、その痕跡をほおに残したものと読むと言うし、とりわけ「求婚者たぎ」(“many a desperate swain”)には、命を賭してもそれに口づけしたいと望む者もいたものだと言え。いっぽう女性たちは、ジョージアナの痣を「血塗られた手」(“the Bloody Hand”)と呼び、そのためにジョージアナの「美しさ」(“the effect of Georgian's beauty”)が損なわれ、彼女の見た目をひどいものにしていくと決めつけている。「男性の観察者たち」(“Masculine observers”)は、この痣がなければ彼女は「この世での『理想的な繊細美の生きた見本』(“one living specimen of ideal loveliness.” X: 38) となっていたらどうかと考える傾向があり、その痣がなくなることを望むといったものである。いずれも観察者たちの恣意的な理解が提示されているのだが、これらが列挙されているという点に、この作品を読み説いていく鍵があるようである。

まず、これらの解釈はいずれも観察者たちの恣意的な読みという点で、いずれも互いに等価である。観察者たちそれぞれの集団における文化的背景や文化的価値観を示すかのように、それらの集団の意見はそれぞれの偏向を示しているように思われる。恋する者たち、同性である女性たち、そして男性一般とい

った集団が持つ偏向は、それらが恣意的もしくは直観的であるという点で等価である。

それらの解釈がすべて等価であるということは、痣はどのよう受け止められてもよいということの意味するし、それぞれの集団における文化的価値観によって決定されてもよいということも意味するだろう。もちろん、これは痣の意味が決定不可能な状態にあることを前提としての話ではある。ひょっとしたら真意というものはあるかもしれないし、そのように信じることは可能である。しかしながら、真意のあることの可能性は排除されていないと言いうるのみであるかぎりにおいては、痣の意味は決定不可能と同義となる。

この点は、エイルマーが痣の解釈を邪悪なもの象徴として「選び取る」(“selecting it [the birthmark] as the symbol of his wife's liability to sin, sorrow, decay and death.” X: 39) と語られるように、解釈が選択可能であることが示されていることから理解されるだろう。事実、ジョージアナはそれをチャーム(魅力・魔除け)と理解していたのだし、彼女がそれとは異なる意味で痣を理解し始めたようにみえるのは、夫であるエイルマーの解釈に理解を示し始めたからである。その意味では、この物語の悲劇は、エイルマーの選び取った解釈が、痣を邪悪なもの象徴であると捉えるものになっていったことである。し

たがって、なぜエイルマーがジョージアナの痣を邪悪なもの象徴として考えるようになったのかということが、まず問われなくてはならない。

この疑問に答えるヒントとして、もしくは、ここでの解釈の列挙が与えてくれる二つめの鍵として、これらの解釈が提示されていく順序に注目してみたい。この順序によって、痣を取り除かねばならないことが自然の成り行きのように感じさせられていることには注意が払われる必要がある。男性たちがジョージアナの痣に魅力を感じ、口づけすらしたくなるということに始まり、同性からは毛嫌いされてしまうことが例示される。おそらく、ここで示唆されるのは性的な魅力であり、男性を魅了するけれども、露骨に官能的であったりコケティッシュに見えたりすることが同性である女性にとっては、嫌悪の対象となっていたということである。エイルマーは最後に語られる解釈に与する者として自認したと語られるけれども、それは男性による別の視点であり、それはこの痣がなければジョージアナがこの世での理想美の生きた見本となっていただろうと考えるものであった。

このように不自然さを感じさせることなく、痣に関するエイルマーの態度が語られるのだが、しかし不可解なのは、彼がそのように考え始めるのが結婚後のことである点だ。「というの

も、彼はそれ以前にはこの問題についてほとんど、いや全く考えていなかった」(“After his marriage—for he thought little or nothing of the matter before—Aylmer discovered that this was the case with himself.” X: 38) というのだから。また「エイルマーが、おそらく多くの求婚者のいたジョージアナを「説き伏せて」(“persuaded.” X: 36)、結婚にこぎつけたということも見逃してはならない物語内事実である。そのエイルマーが結婚してまもなく、痣が気になってしかたなくなってしまうというのはどのような事態なのか。手に入れるものを手にしてしまっただけでも言うのか。痣を取り除くことが可能かという科学的な関心が、そのもっともらしい理由として描かれていくのだけれども、そもそも痣を邪悪なものとする原因ではないはずである。とするなら、結婚生活がなんらかの影響を与えたと考えるのは妥当な見ではなからうか。本論はこのような疑問から出発して、この作品を、結婚生活におけるエイルマーの(ひいては白人男性の)性的不安が密やかに描かれたものとして読むこととなる。

3 エイルマーの読む行為

作品内においても作品研究においても、痣に何らかの意味が

読み取られていく傾向があるように思われるが、痣は単にジョージアナの感情の動きを示しているにすぎないことは見落とされてきている。痣そのものは不動不変であり——痣はモノとして、そこに在るのみであり、形も色も変わることはない——むしろ、それを取り囲む肌の色調の変動を映し出す鏡として作用している。痣は、ジョージアナの情緒的变化を示す顔色によって、目立たなくなったり、より際だったりするようになるだけのものである。このような点に鑑みるなら、彼女の情緒が何によって変化しているのか、それが何を伝えようとしているのかが、我々の関心をひくことになる。ジョージアナの情緒変動が、痣を見るエイルマーの態度によって引き起こされていくことにも留意する必要がある。エイルマーにとって「恐ろしいくらいはつきりと見えるようだ」(“in what Aylmer sometimes deemed an almost fearful distinctness.” X: 38) と言及されていることから、それがくつきりと見えることに「恐ろしい」という感情を抱くのは夫であるエイルマーなのである。

ジョージアナとエイルマーが新婚であること、そしてエイルマーが痣にこだわるようになったのが結婚後とされていること——文字通りに「身も心も」(“whether of soul and of sense”)、ジョージアナの美しさが彼に「悦楽」(“delight”)を与えていた、「新婚で最も幸せな時間を過ごしていたはずであるときで

たぞ」(“At all the seasons which should have been their happiest.” X: 39) 彼の気持ちに痣に向かっってしまうこと——を考慮するなら、ジョージアナの情動的な徴候(感情の無意識的な身体的反応としての表出)は、性的なコノテーションを大いに含んでいるものと思われる。

このように、この作品がセクシュアリティの問題に関わるものとする指摘は、それぞれ異なる視点を持ちながらも、すでに六〇年も前からなされており(Simon Lesser: 1957; Frederick Crews: 1966) 受けつ、Nina Baym (1976) ʼ Judith Fetterley (1978) からのフェミニスト的なセクシュアリティの読みが続き、また Allan Gardner Lloyd Smith (1983) から James N. Mancall (2002) による自慰行為への不安や嫌悪を指摘する論考などに続いてきている。すでに述べたように、本論も同様にセクシュアリティに関心を寄せるが、端的に述べるなら、男性における性的な不安(コンプレックス)である。エイルマーにとって、ジョージアナの痣は、結婚前には気にもかけていなかったにもかかわらず、結婚してしばらくすると寝ても覚めても気になってしまうほどのものとなる。また、そのこだわりは、男性としての視線に与するものとされているのである。(それは「男性の観察者たち」と同様の見解であり、ホーソンによる“masculine”という形容辞の、他作品での使用事例か

ら推察するに、男性的な性を含意していると考えられる。

類似した指摘をするのは、ラリー・レノルズ (Larry J. Reynolds) である。レノルズは、「この物語を、完全論 (perfectionism) に偽装した男性的支配欲が若き女性にもたらした破壊を描いたものと理解しており、痣は、「俗世における不完全さ、性的欲望、他の男性に手をつけられていた(処女ではなかった)こと」の象徴」(“symbol of earthly imperfection, sexual desire, and prior possession by another”) であると指摘する。そして、おそらくレノルズも暗に示しているように、エイルマーは(性的に)「不能」(“impotence,” Reynolds, 20) である可
能性も否定できない¹²⁰⁾。

おそらくエイルマーはジョージアナを性的な意味で紅潮(満足)させることができていなかった。これが本論の読解である。エイルマーが性的に完全な「不能」ではないにせよ、ジョージアナに満足感を与えるほどの能力を持ちあわせていなかった——あるいは、持っていないのではないかとエイルマー自身が思いこんでいた(彼の科学者としての経歴に鑑みるなら、おそらくエイルマーはかなりの年配なのではないかとも想像できよう)——と考えることはできるだろう¹²¹⁾。ジョージアナの顔が紅潮すると痣は目立たなくなることを考慮にいれるなら、痣の濃淡が彼女の性的満足度の指標となってしまうことになる¹²²⁾。

それゆえに、エイルマーにとっては、痣が特別の意味(自身の能力を示す指標)を持つことになる。痣はエイルマーにショックを与えるものなのだ (X: 37)。

このような性的不安を覆い隠すかのように、エイルマーのジョージアナへの愛と、完全論につながると思えるエイルマーの科学への情熱とがパラレルに置かれることになる。「彼の若い妻への愛情が科学と比べても勝っていたかもしれない。しかし、それは妻への愛と科学への愛とを組み合わせ、科学への愛の強さを妻への愛に結びつけることによってのみ可能だった」

(“His love for his young wife might prove the stronger of the two, but it could only be by intertwining itself with his love of science and uniting the strength of the latter to its own.” X: 37)。しかし、レノルズの(偽装とみる)読みとは異なり、いずれもエイルマーの能力(「不能」impotence)をめぐる物語として等しく扱われることで、二つの愛情(欲望)が一つのものであるように描かれているところに、この作品の技巧があるように思われる。つまり、そのように科学への愛と妻への(性的な)情愛(そしてそれへの不安)はすでに物語のなかに用意されていたのだから、偽装があるとするとするなら、あるいは意味の脱構築があるとするとするなら、後に触れるように、それは単に異性のセクシュアリティに対する性的不安ではなく、異人種(ここ

では奴隸であった黒人) に対する(白人男性の) 性的不安が(根底に) 反映されていると考えられることだろう。

ともあれ、これまでの議論で確認しておくべき点は、この作品が、エイルマーの視点に軸を置きながら、完全さの追求の代名詞としての科学的法則への飽くなき探求と性的不安といった問題を、びたりと合った二枚の反転像のように二詞一意として等しく扱いながら、物語として一つの像を結んでいるということである。別言するなら、その物語が、エイルマーによる恚の解釈とその帰結として結ばれていることになる。そして、おそらくより重要なのは、われわれもそのエイルマーの視点に寄り添って読み進めてきたということだろう。だが、それは、またいっぽうで、他の視点による読みを示唆することにもなる。

さて、やがて、恚切除の手術によって生身であるジョージアナは息絶え、物質性に非物質性が絡み合う存在であることが確認される。ジョージアナの身体の一部である恚は、シンボリックな対象へと変えられている。恚は、多くの解釈が紹介されているように、意味を帯びているとされるようになるが、そのことにより、それはジョージアナの外部、彼女の身体ではないものとも考えられることになる。エイルマーは、そして彼に同意するかたちでジョージアナも、その外部を取り除くことができると信じることとなった。だが、ジョージアナの死によって示

されるのは、恚が彼女の身体にとって外部ではなく不可欠な一部であること、つまり身体の一部というだけでなく、身体によって生命が維持されているという意味において、生命の根源ともなる身体そのものであるということであり、その点において、エイルマーの恚の解釈は誤読であったということである。そして、この誤読とは、読むという行為に隠されたアポリアであり、すべての意味の現前が叶わず、他の可能性を切り捨てることを意味することになる。

4 ジョージアナの読む行為

エイルマーの読みを前景化する物語において、対称/非対称なイメージの対立項が交叉している。それらは、「俗世の不完全さ」(“earthly imperfection, X: 37”)と「それに対応すると思われる別世界の完全さ」(“unearthly perfection”)に始まり、「死」(“mortal”)を含意する「人間」(“human”)と、「そしてそれと対になる」不死(“immortal”)との交叉、そして「唯物的な考えかた」(“materialism”)と「それと対照的に非物質的と思われる」無限性(“the infinite”)、身体的(“physical”)と「精神的」(“spiritual”)、感覚(“sense”)と「感性」(“soul”)などところばを変えて、物語に織り込まれている。ジョージア

ナの恚は、それらの対立項が衝突するトポス、物質性と非物質性が混在している様子を示すトロープとして呈示され、エイルマーの読みにおいては象徴へと転化され、モノ化（身体から独立した存在、ジョージアナの外部）とされてしまう。それは、前節にも見たように、恚が身体の一部であること（身体性）が否定されてしまう事態でもあった。

そういった非対称性の交叉による傾斜にバランスを持たせるかのように、物語には対話や鏡像というかたちで、エイルマーの読みとは異なる読みが埋め込まれている。たとえば、恚をモノと見るエイルマーの視座はジョージアナにも共有されることになるのだが、彼女は単に男性によって支配される性として描かれているのではなく、物語には彼女からの視点が挿し入れられていることは留意すべきだろう。彼女がオベに同意し、実験室に移ろうとした矢先に気を失ってしまう。別の領域（空間）への入り口を示す「閾（“threshold,” X: 43）」を越えたとたんに彼女は気絶し、気づいたときには不思議な空間のなかにいる。閾を境にして、ここまでのエイルマーからの視線に寄り添った描写から、ジョージアナの視線による描写に変わる場面が現れる。彼女は書齋でエイルマーの研究日誌を見つけているが、そこに明らかにされるのは、彼の研究の多くが失敗しているということである。しかし重要なのは、ジョージアナが、身体的変化と

しては強く表出することのないエイルマーの欲望の激しさを彼の日誌の中に「読み込んで」いることだろう。また、さらに重要なのは、彼女が彼の失敗に能力の欠如を読み取るのではなく、情熱を読み込むという誤読を冒していたことではなかったか。（「ジョージアナは、読み進めるにつれ、エイルマーに敬意を感じ、いままでよりもずっと深く彼のことを愛するようになった」“Georgiana, as she read, revered Aylmer, and loved him more profoundly than ever.” X: 49）。ジョージアナはその欲望に応えることによって結婚生活の破綻を回避しようとするのだが、図らずもその読みは、エイルマーのもう一つの欲望を満たそうとする行為にもなるのだった。

続いてジョージアナはエイルマーの欲望が具体化された瞬間を垣間見ることになる。エイルマーに「潤んだ歌声」（“the liquid of her voice”）を聴かせ、「彼の精神的な乾き」（“the thirst of his spirit”）を癒したあと、彼女は身体に「ちむちむとした、落ち着かな、感覚」（“a sensation in the fatal birthmark, not painful, but which induced a restlessness throughout her system,” X: 50）を感じ、衝動的に彼の姿を求めて行く。そこは性的なエネルギーの代替としてエイルマーが打ち込む科学実験の現場である。おそらく性的な衝動に駆り立てられて赴くジョージアナが、そこで最初に目にする火の燃えさかる炉、むせるよ

うな空気、むき出しの壁といったものは、そのむき出しの粗さから、彼女の知る閨房にはない性的なイメージを喚起する。だが、さらに、そこに彼女が見いだすのは、青白い顔をした科学者（精力の感じられることのない夫）エイルマーの姿であり、それによって、科学への愛（欲望）においてもジョージアへのそれにおいても、エイルマーの能力への疑い（不能さ）をむき出してしまふことになるのだ⁵。

5 アミナダブの視線と読むことの否定

ここにおいて、もう一つ別の視線があることを我々は思い出す。それは、エイルマーとは対照的に描かれる、たくましい身体に煤の黒が染みついたアミナダブ (Aminadab) の、野性的で活力にあふれた姿 (“man's physical nature.” X: 43) である。アミナダブの煤だらけの顔は肉体労働と結びつけられうるであろうし、強調される身体的強靱さからはエイルマーとは対照的な性的なコノテーションが喚起される。そしてまた、その顔は暗い肌を想起させることにもなるだろう。ここで、この人物が黒人（奴隸）であると読みたくなる衝動にかられるかもしれない。しかし、アミナダブが黒人であるという決定的な証拠はない。ただし、物語冒頭でエイルマーがジョージアナに結婚を

説得するとき、彼が黒い煤を落としたとあるのは、一つの解釈を立てるにあたって役に立つかもしれない。彼は、ジョージアナに求婚する際、アミナダブと同じように実験室でついた黒い煤を落とし、すっかり身なりを整えたと語られていたのだが、それはおそらく白人の紳士として姿を現したことを意味する。煤がエイルマーの肌を黒くしていたわけであり、その姿は白人が黒人に扮するミンストレル・ショーを彷彿とさせていたとは考えられないだろうか⁶。白人による黒人への擬装である。とするなら、アミナダブが黒人として読まれる必要はない。黒という色によって喚起される連想への可能性があるだけで十分となる。

エイルマーがおそらく黒を嫌悪していたかもしれないと思われること、そしてそれがジョージアナのセクシュアリティと連想されていたであろうと考える根拠は、物語装置である鏡像の効果にも見られる。一つはエイルマーが撮るダゲレオタイプ（銀板写真）に顕れる。ダゲレオタイプは対象を逆さまに写し出すという点以外は基本的な原理は鏡に似ている。そのダゲレオタイプで、エイルマーはジョージアナの気を晴らそうと彼女の姿を撮影するのだが、その姿を映したダゲレオタイプをすぐさまエイルマーが投げ捨ててしまうのは、そこにくっきりと映った痣にジョージアナが恐れたためだけではない。おそらく彼

自身もそのくっきりと映る「手」(痣)の影に恐怖するからである。十九世紀に開発されたダゲレオタイプが、我々の知るカラー写真ではなく、単に白と黒の陰影として対象を映すことを思い起こすならば、少なくともエイルマーの目には(当時の読み手にとっても)、ジョージアナのほおには、黒い影のようなものが彼女のほおをなでる黒い手のように映っていたはずである。エイルマーにとって、痣が自身の能力を示す指標となっていたことを思い出すならば、その嫌悪は、白人男性であるエイルマーの、色の黒い異人種に対する性的不安が反映されていると読むことも許容されるのではあるまいか。

しかし、おそらく物語はそれを許してくれないだろう。エイルマーの実験(性的リビドーの代替的な試み)が失敗したと思われた瞬間に、アミナダブの笑い声が聞こえてくるのだ。それが、その男の喜びを表すもの(“Amnaddab's expression of delight.” X: 55)——しかも“delight”は、ジョージアナと新婚生活を過ごすエイルマーが「身も心も」感じていた喜びを表すときに用いられていたことば(X: 39)——であることをみるなら、おそらくそれは、前出したレノルズも指摘していたように、科学者としての不能さ(そして二詞一意としての性的パートナーとしての不能さ)をあざけり笑ったもの(とエイルマーが妄想していたもの)と理解することができるだろう。その笑

い声は、エイルマーが長年耳にしていたものであること(The [Aynher] had long known.” X: 55)——このときのみに発せられた笑いではないこと——をみるなら、この笑いは、エイルマーの誤読が招いた愚行に向けられただけではないようにも思われる。それはおそらくあらゆる読み(誤読)への笑いとも理解すべきなのではないか。

よく指摘されることだが、アミナダブは、その綴り(Amnaddab)が鏡文字(Bad anima)「邪悪なアニマ」として読めるために、邪悪な精神エネルギーと連想されがちである。その連想は、アミナダブを悪意のある異質のものと読むかどうかという問題に関わってくることになるのだが、もとよりアミナダブに悪意があるように描かれていないことには留意しておく必要があるだろう。むしろ、アミナダブは、エイルマーがジョージアナの痣を取り除くことを決めたとき、「もしこの女性が自分の妻なら、決してあの痣とお別れしようなどと思もしないのだが」(“If she were my wife, I'd never part with that birth-mark.” X: 43)と独り言を漏らすことで、唯一エイルマーの行動に水を差すような発言をする人物である。

とすれば、痣にまつわるエイルマーの読解も、そこに彼の性的不安を読み込む行為も、さらに異人種への性的不安感といった読み込みも、冒頭で述べたように、痣にまつわる解釈の列挙

に連なるだけになることだろう。アミナダブの笑いは、いかなる読みも、無効にし、否定し、打ち消してしまうものとなる。彼の笑いは物語の最後においても繰り返される。

それから、またあのしゃがれたクックツとした笑いが聞こえてきたのだ。このように、粗野な地上の宿命性は、不滅の存在に対して常に勝ち誇るのだ。その存在はこの薄暗い未発達領域にあって、よりいっそう高度な完璧さを求めるというのに。しかし、もしエイルマーがもっと深遠な叡智に達していたなら、天上と変わることはない素材で、死すべき人間である自分の人生を織り上げてくれたかもしれない幸福をこのように投げ捨てる必要はなかっただろう。この一瞬の状況は、彼には強烈過ぎたのだ。彼は時という曖昧な領域の向こうを見通すことができず、しっかりと永遠の中に生き、現在の中に完璧な未来を見ることができなかったのだ。

Then a hoarse, chuckling laugh was heard again! Thus ever does the gross Fatality of Earth exult in its invariable triumph over the immortal essence which, in this dim sphere of half development, demands the completeness of a higher state. Yet, had Alymer reached a profounder wisdom, he

need not thus have flung away the happiness, which would have woven his mortal life of the self-same texture with the celestial. The momentary circumstance was too strong for him; he failed to look beyond the shadowy scope of Time, and, living once for all in Eternity, to find the perfect Future in the present. (X: 56)

「悲」は悲について語っているのではなく、悲の解釈をめぐる物語を描いている。悲を語りながら、別のものを語っている。そしてその結論が、「しっかりと永遠の中に生き、現在の中に完璧な未来を見ることが」は常に叶わぬことであり、それが地上的な宿命であるとするなら、そこに含意されるのは、すべての読みは打ち消されるということであり、常に天上的な完璧さには至らず、それは常に未来に先送りされるということになるだろう。「この一瞬の状況」(“The momentary circumstance”)、意味を指定したという瞬間の洞察は、すぐに過去のものとなること、そして「時という曖昧な領域」において、それは現在ではありえないということに盲目になってゐることを告げているのかもしれない。だが、この作品の示す、読むことの倫理は、それをもまた打ち消すことを要求するのだ。

(1) 以下に論じる「痣」の読解の一部は、二〇一八年六月二日(二四日)に京都で開催された「ホー&ホーソン」国際会議「International Poe & Hawthorne Conference」於「京都ガールデンパルク」にて発表した拙稿と重なっているところがあつたことをお断りしておく。

(2) レノルズは、作品の解題において「ジョージアナが息絶えようとするさなか、『粗野なクックツと笑うような声が再び耳に入ってきた』。それはあの煤だらけのマミナダブから聞こえてくる声であり、エイルマーの不能をさみぢ笑っていたのだつた(“As she [Georgiana] dies, ‘a hoarse, chucking laugh was heard again!’ (X: 56) coming from the sooty Aminadab, mocking Aylmer’s impotence.”) (Reynolds, 20) と解説するのだが、このエイルマーの不能あるいは無能さ(impotence)にうつては、何も明確には述べられつゝないし、説明されてもいない。

(3) たとえば、次のような箇所を参照するとよい。
 “When she blushed, it [the birth-mark] gradually became more indistinct, and finally vanished amid the triumphant rush of blood, that bathed the whole cheek with its brilliant glow.” (X: 37)。血流が増加するよつな事態(興奮などの感情変化)によつて

顕現したり不可視化したり (“glimmering to and fro with every pulse of emotion that thrubbed within her heart.” X: 38) する様子を見るなら、痣の濃淡が身体的変化と関わりることが理解される。また、ジョージアナの痣が気になるなか、エイルマーはジョージアナの痣を切除していく夢を見るのだが、痣はジョージアナの身体の奥深く心臓にまでつながらつていた。これをみれば、エイルマーが痣を恐れるのは、痣が心臓の鼓動、血流の動きとつながつていてと考へていたことになるし、それはまた、痣が身体的反応を示すものとなつてゐることが示唆されることだろう。

(4) 別にも言及したように、痣のためにジョージアナの美しさが損なわれ、彼女の顔をひどいものにしてゐると決めつけてゐるのは、えり好みの激しい者たちであるが、語り手が「とはいへ、それはジョージアナと同じ性(女性)に限られるのだが」とつけ加へていることを見るなら、同性である女性にはあからさまに感じられるよつな(男性に魅力的なゆゑに女性には「恐ろしく(“hideous”) 見えてしまふ) エロティシズムを痣の濃淡が示しているとも考へられよう。

(5) このよつにみるなら、“Again: do we know that there is a possibility, on any terms, of

unclasping the firm gripe of this little Hand which was laid upon me before I came into this world?” (X: 41) とつたジョージアナの発言にも、エイルマーに対して挑発的な、あるいは挑発的とも思へる視座が見てとることができるだろう。

(6) ミンストレル・ショーは一八三〇年代から見られ、ホーストンでも演じられたといふことから、ホーソンが知らなかつたといふこともないと思はれる。

(7) 主題から若干逸れているので本文には組み込まなかつたが、蛇足となることを承知で次の点を指摘しておきたい。エイルマーの異性(ジョージアナ)をめぐる完璧主義は、アポテオシス(apothosis)を喚起する。その一方で、それを求めるエイルマーは科学者として不能(impotent)である。これは地上世界の住人としての運命と理解されよう。だが、それと並行して、エイルマーが男性として不能であることは、陰画的に、健康者を優位におく思想(calumn)をも喚起する。アミナダブの笑ひは、エイルマーの態度に表象される思想(全きものを善とする思想)の亀裂を意識させ、アイロニカルに眺めることを促す声ともなつてゐる。

引用文献

- Baym, Nina. *The Shape of Hawthorne's Career*. Cornell UP, 1976.
- Crews, Frederick. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*. Oxford UP, 1966.
- de Man, Paul. *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism*. U of Minnesota P, 1983.
- . *The Rhetoric of Romanticism*. Columbia UP, 1984.
- . *Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust*. Yale UP, 1979.
- Fetterley, Judith. *The Resisting Reader: A Feminist Approach to American Fiction*. Indiana UP, 1978.
- Hawthorne, Nathaniel. *Mosses from an Old Manse*. Vol. X of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ohio State UP, 1974.
- Lesser, Simon. *Fiction and the Unconscious*. Beacon Press, 1957.
- Lloyd Smith, Allan Gardner. *Eve Templed: Writing and Sexuality in Hawthorne's Fiction*. Barnes & Nobles, 1983.
- Mancall, James N. *Thoughts Painfully Intense: Hawthorne and the Invidial Author*. Routledge, 2002.
- Reynolds, Larry J. "Hawthorne's Labors in Concord." *The Cambridge Companion to Nathaniel Hawthorne*. Ed. Richard H. Millington. Cambridge UP, 2004, pp. 10-34.
- Ullien, Magnus. *The Half-Vanished Structure: Hawthorne's Allegorical Dialectics*. Peter Lang, 2004.